

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

平成 27 年 6 月 3 日現在

機関番号：14401

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2013～2014

課題番号：25883004

研究課題名(和文)1930～50年代アルプス地域におけるツーリズム振興体制の研究

研究課題名(英文)A study of tourism promotion system in 1930-50's Alps region

## 研究代表者

森本 慶太 (MORIMOTO, Keita)

大阪大学・文学研究科・研究員

研究者番号：20712748

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,100,000円

研究成果の概要(和文)：アルプス地域を主要観光地に擁するスイスをはじめとするドイツ語圏諸国は、1930年代から50年代にかけて、世界恐慌や大戦の影響により、ツーリズム振興の方向性を見直すことを余儀なくされた。本研究では、そこで新たに構想された観光政策の歴史的意義について、観光学の形成とマス・ツーリズムへの対応、という二つの視点から解明することを試みた。については、スイスで観光学が制度化される歴史的背景を明らかにし、については、観光学者たちが戦後を展望した観光政策を構想する過程とその内容を検討した。

研究成果の概要(英文)：The Great Depression and the Second World War forced German-speaking countries, which had the Alps region as a major sightseeing area, to reconstruct the tourism promotion from the 1930s to the 1950s. This research project attempted to investigate the historical significance of the new tourism policy from two perspectives: the making of tourism studies and the response to mass tourism. It explained why the tourism studies in Switzerland during the war were systematized, and how scholars planned a new tourism policy, looking beyond the Post-war situations.

研究分野：地域研究

キーワード：ツーリズム アルプス スイス ドイツ オーストリア 観光学 ソーシャル・ツーリズム

## 1. 研究開始当初の背景

研究代表者はこれまで、スイスにおけるツーリズム振興の歴史をテーマとして、研究に取り組んできた。スイスのツーリズムは、19世紀半ばからの英独を中心とする外国人観光客の急増にともなうアルプス地域を中心に興隆し、世界的に見てもインフラやホスピタリティにおいて高い水準を維持してきた。また、産業としてだけでなく、環境問題、国家・地域イメージ形成への貢献といった側面も無視できない。アルプス地域におけるツーリズム発展の歴史的前提を探ることは、世界的なツーリズムの展開や現代の関連する諸問題を考えるうえでも、きわめて重要である。

スイスでも近年になり、近現代アルプス地域のツーリズム史研究が蓄積されつつある。ケーニヒ (W. König, *Bahnen und Berge*, Frankfurt a.M. 2000) の研究は、ベルン高地地方とグラウビュンデン州の19世紀末から1930年代にかけての観光開発とその影響を分析している。しかしこの研究は、分析が交通機関の発達などの技術的側面に偏っており、しかもアルプス地域全体を視野に入れているわけではない。最近ではより広い視野からツーリズムを対象とする歴史研究も現れてきている。ティソの研究 (L. Tissot, “Développement des transports et tourisme?”, *Revue Suisse d’Histoire*, 56 (2006) など) は、スイス観光業の発展史について観光業だけでなく、ツーリズムにかかわる諸要素の連関を重視する立場から把握している。しかし、分析の中心はあくまでも19世紀スイスにあり、アルプス地域全体への関心も薄い。それに対し、シューマッハ (B. Schumacher, *Ferien*, Wien 2002 など) の諸研究は、1930年代以降のツーリズムの変容に着目した画期的研究だが、分析の対象はツーリズム現象全体の把握ではなく、スイス人の余暇の過ごし方の変遷にある。

上記の先行研究に対し研究代表者は、戦間期の歴史的意義に注目し、当時のツーリズムの変容について、観光業界と連邦政府との関係を研究してきた。その結果、大戦間期に、マス・ツーリズムの受容がスイス社会全体にとっての重要課題となり、高級観光地としての地位の維持か、あるいは大衆化による観光業の復興か、という二つの立場の間で激しい議論が繰り広げられたことが明らかとなった。さらに、当時のマス・ツーリズム受容をめぐる葛藤が、第二次大戦後のツーリズム振興体制を整備するうえでの基盤となったことを指摘した。

今後の研究では、スイスのみに対象を限定することなく、比較と関係の視座に立った「サクセス・ストーリー」の相対化が求められる。例えば、ツーロブ編の歴史研究 (Eric G. E. Zuelow (ed.), *Touring Beyond the Nation*, Farnham 2011) は、国境を越えて諸

国民が移動するトランスナショナルな現象としてツーリズムを把握する必要性を主張している。研究代表者は、こうした新たな視点を導入して、複数の国境が交錯するアルプス地域のツーリズムの歴史的意義を捉え直すことを着想した。

## 2. 研究の目的

研究代表者は、これまでの研究を踏まえて、第二次大戦後のドイツ語圏アルプス地域でのマス・ツーリズム形成に注目し、思想的・制度的視点から、その歴史的背景を解明しようとした。その際に、ツーリズムが大衆化によって現代的形姿を整える、1930～50年代という時期の連続性に注目し、この時期を戦争による断絶という視点だけから理解するのではなく、連続と断絶の両面から分析することで、第二次大戦後の現代ツーリズムを規定するシステムの性格に迫った。

前者については、現代の組織的なツーリズム振興の基盤となった思想を解明するため、ドイツ語圏で活躍した観光学者の研究活動と観光学の制度化に向けた動きに焦点を当てた。後者については、観光学者による実践活動に注目し、マス・ツーリズムに向かう時代状況に対応した制度や組織の構築の過程について、社会的視点から考察した。

本研究は、以上の二つの視点から、1930年代から50年代にかけての時代をアルプス地域のツーリズムの転機としてとらえ、19世紀型の高級ツーリズムがマス・ツーリズムへと変容していく過程を描くことを試みた。

## 3. 研究の方法

まず、19世紀以降現代までのアルプス地域におけるツーリズムの展開について、基礎的研究を進め、アルプス地域研究の動向把握と関連資料の収集に努めた。収集に際しては、スイスに限定せず、ドイツ語圏全体で公表された文献調査の実施を目標とした。調査は主にスイスのスイス経済文書館とドイツのベルリン州立図書館においておこなった。2年次にはオーストリアのティロル州立文書館とウィーンのオーストリア国立図書館で調査を実施した。

さらに本研究では、アルプス地域研究の動向を視野に入れながら、第二次大戦後のツーリズム振興体制の整備において、アルプス地域が果たした役割について研究を進めるべく、1930年代から40年代前半に活躍したドイツ語圏の観光学者の活動に焦点を当てることで、戦後アルプス地域のツーリズム振興構想の歴史的背景の解明を目指した。

以上の研究に際して、スイスの代表的観光学者であるフンツィカーやクラブの活動に注目し、彼らの研究・教育活動に関する史料をベルン州立文書館とザンクト・ガレン州立文書館で収集した。あわせて、ベルリン工

科大学観光文書館（HAT）を訪問し、そこで網羅的に収集が進められているドイツの観光学研究文献や戦前にドイツで発行された観光学研究の定期刊行物を閲覧し、ドイツ語圏の観光学者が理論と実践の両面で社会に与えた影響を探った。

次に、観光学者・観光業界と政府との関係を検討し、ツーリズムに関する政策決定メカニズムを明らかにするため、ツーリズム振興に関与したスイスの業界団体に焦点を当てた。まず、これらの団体が1930年代から50年代にかけて構築した、ツーリズム振興体制の枠組を確認したうえで、戦後のマス・ツーリズムを下支えした「ソーシャル・ツーリズム」の構想に注目し、それが観光学者・業界人、それに政府を通じて推進される背景を探った。

以上の研究に際しては、スイス経済文書館に所蔵されている、観光関連団体の一次史料を活用したのに加え、オーストリアとの比較研究の材料となる文献をオーストリア国立図書館において収集した。

#### 4. 研究成果

(1) 初年度にあたる平成25年度については、

(a) アルプス地域研究に関する文献資料の収集、(b) アルプス地域に関心をもつ歴史研究者との意見交換、(c) スイスとドイツにおける現地調査、(d) スイスとドイツのツーリズム史研究者との意見交換を実施する計画を立てた。

研究遂行に際しては、研究課題に関する先行研究の少なさから、(a) の作業を優先的に進め、収集した資料をもとに、アルプス文化史に関する研究入門書の執筆作業を進めた。並行して日本国内のアルプス地域史に関心の深い研究者と意見交換を進めるため、平成25年11月16日に國學院大學渋谷キャンパスで開催されたスイス史研究会第80回報告会に参加した。

(c) および (d) の作業は、年度の終盤に集中的に進めた。(c) については、平成26年3月にスイスとドイツを訪問し、史料調査を実施した。スイスでは、観光学研究機関の所在するザンクト・ガレンとベルンにおいて調査をおこなった。ザンクト・ガレンでは、ザンクト・ガレン州立文書館で、ザンクト・ガレン商科大学観光講座設立に関する一次史料を閲覧・収集した。ベルンでは、ベルン州立文書館で、ベルン大学観光研究所設立前後の史料を中心に閲覧・収集した。ドイツでは、ベルリンを訪問し、先述のHATで戦間期ドイツ語圏の観光学研究に関する文献を閲覧・収集した。あわせて、ベルン州立図書館でドイツ語圏観光学の二次文献を閲覧・複写した。また、現地滞在中は(c)の作業に並行して、(d)の作業を実施した。スイスでは、ヌシャテル大学のL. ティソ教授と面会し、アルプス地域ツーリズム史の研究動向に

ついて情報提供を受けた。ベルリンでは、HATの責任者H. シュポード教授と意見交換を進め、ドイツ語圏の観光学史に関する研究動向や一次史料についての情報提供を受けた。以上の研究により、1930～50年代にかけてのドイツ語圏観光学の展開を歴史的に把握することができた。

平成25年度の成果としては、本研究課題に取り組む準備作業として、1930年代のスイス観光業界の動向についてまとめ、平成25年5月に開催された第18回ワークショップ西洋史・大阪において「1930年代スイスにおける危機とツーリズム：観光業界の組織化をめぐる」と題する報告を、また、同年6月には、近代社会史研究会第246回例会において「1930年代スイスにおけるツーリズムの再編：スイス観光連盟と大衆化をめぐる」と題する報告をおこなった。さらに、研究対象のスイスに関する翻訳書を『西洋史学』第250号において紹介した。

(2) 最終年度となる平成26年度は、前年度の現地調査を踏まえ、(a) アルプス地域における「観光学」の形成過程とマス・ツーリズムへの対応、(b) 従来の調査で扱っていなかった、オーストリア・アルプス地域における観光学史の把握、(c) 前年度から続けてきたスイス・アルプス地域の観光学史の総体的把握と成果の公表、という三点に重点を置いて、研究を進めてきた。

上記のうち、(a) については、1940年代のスイス観光業界の主要人物が、戦時下という国際環境のもとで「観光学」の制度化を推進した事実に関心し、観光業界と中立国スイスで活動していた「新自由主義者」との接点が彼らの活動を支える基盤の一つであることを指摘した。本研究については、平成26年9月に開催された西洋近現代史研究会サマーセミナーで「第二次大戦期スイスにおける観光学研究の展開と戦後構想」と題する報告をおこなったほか、平成27年7月に開催予定の観光学術学会第4回全国大会において報告をするべく準備を進めている。関連して、前年度に調査したザンクト・ガレンという都市の歴史的特質についての小文を『関西大学西洋史論叢』第17号に寄稿した。なお、スイス観光学のマス・ツーリズムへの対応についての研究も並行して進め、戦後のマス・ツーリズムを支えるソーシャル・ツーリズムの構想が、戦時中の観光学の制度化と並行して具体化した事実に関心し、それが戦後を展望した観光振興構想の一環であったことを明らかにした。この論点については、現在論文として公表するべく準備を進めている。

(b) に関しては、平成26年8月にスイスとオーストリアにて文献の収集を主目的とする現地調査を実施した。この調査では、スイス経済文書館で前年度の調査を補足するため文献を収集した。オーストリアでは、ティロル州立文書館とオーストリア国立図書

館を訪問し、オーストリアの観光史を扱った文献の収集を進め、今後の比較研究の材料を入手することができた。

(c) については、研究代表者が研究対象としている時代について、アニメを切り口に論じる機会を得て、藤川隆男・後藤敦史編『アニメで読む世界史 2』(山川出版社)に寄稿した。また、平成 26 年 10 月に慶應義塾大学日吉キャンパスで開催された、「日本スイス国交樹立 150 周年記念国際シンポジウム：フランス語圏スイス再考」に出席し、国内外のスイス研究者との意見交換を進めた。最終的な研究の成果として、平成 27 年 3 月に出版された、踊共二編『アルプス文化史：越境・交流・生成』(昭和堂)の第 4 章とケーススタディ(コラム)に寄稿した。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 2 件)

①森本 慶太、「都市紹介：ザンクト・ガレン：国際学芸都市の今昔」、『関西大学西洋史論叢』、査読無、No. 17、2014、pp. 63-67

②森本 慶太、「紹介：クリストフ・ビュヒ著(片山淳子訳)『もう一つのスイス史：独語圏・仏語圏の間の深い溝』(刀水書房)」、『西洋史学』、査読無、No. 250、2013、pp. 74-75

[学会発表] (計 3 件)

①森本 慶太、「第二次大戦期スイスにおける観光研究の展開と戦後構想」、西洋近現代史研究会第 34 回サマーセミナー、2014. 9. 7、ペンションらんぶる(群馬県吾妻郡草津町)

②森本 慶太、「1930 年代スイスにおけるツーリズムの再編：スイス観光連盟と大衆化をめぐる」、近代社会史研究会第 246 回例会、2013. 6. 22、京都大学(京都府京都市)

③森本 慶太、「1930 年代スイスにおける危機とツーリズム：観光業界の組織化をめぐる」、第 18 回ワークショップ西洋史・大阪、2013. 5. 25、大阪大学(大阪府豊中市)

[図書] (計 2 件)

①森本 慶太(共著)、昭和堂、踊共二編『アルプス文化史：越境・交流・生成』、2015、71-89、114-117

②森本 慶太(共著)、山川出版社、藤川隆男・後藤敦史編『アニメで読む世界史 2』、2015、193-212

[その他]

研究代表者のホームページ(researchmap)  
[http://researchmap.jp/keita\\_morimoto/](http://researchmap.jp/keita_morimoto/)

アウトリーチ活動

①森本 慶太、「講演：現代世界の源流①二つの大戦と国民国家の時代」、NPO 法人大阪府高齢者大学校世界史から学ぶ科第 37 回、2015. 2. 26、大阪市教育会館(大阪府大阪市)

②森本 慶太、「講演：近代とは何だったか⑤観光の視点から」、NPO 法人大阪府高齢者大学校世界史から学ぶ科第 38 回、2014. 2. 27、大阪市教育会館(大阪府大阪市)

③森本 慶太、コーディネーター：『ハイジ』から学ぶ世界史、サイエンスカフェ@待兼山 No. 109、2013. 9. 14、大阪大学総合学術博物館(大阪府豊中市)

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

森本 慶太 (MORIMOTO, Keita)

大阪大学・文学研究科・研究員

研究者番号：20712748